

【研修報告】

18th Annual Dysphagia Research Society Meetingに参加して

山根 由起子*

はじめに

18th Annual Dysphagia Research Society Meetingが2010年3月3～6日の4日間、アメリカのカリフォルニア州サンディエゴで開催された。サンディエゴは、西海岸の最南西端にある海岸沿いに位置し、動物の種類と数が世界一のサンディエゴ動物園があり、治安は以前よりは良くなった街といわれているものの、一人で歩くのは安全とはいえない環境にある。

本学会は、嚥下障害における国際的な学会であり、年に1度、北米で開催されている。今回の大会長は、ジョージア大学のGregory N. Postma先生で、経鼻の内視鏡を用いた食道の検査、また喉頭の動きや感覚などについても多くの仕事をされている。

学会参加者は約350名で日本からの参加者は約60名、看護師の参加は愛知県立大学の鎌倉やよい教授を始め、私を含めた6名であった(写真1)。私は、国内と国外の実践活動の違いや先端の研究を知り、今後の研究の視点を明確にして発表することを目的に今回の学会に参加した。

参加職種は医師、歯科医師、音声言語病理学士、言語聴覚士、看護師、放射線技師、栄養士など国際的専門家が集まり、最先端の幅広い研究発表であった。ここでは一部を紹介する。



写真1 参加した看護師と神経内科医師

1. 学会の様子

プログラムは、口演7つのセッション27演題と8つの学術論文プレゼンテーション56演題が会期中に行われた(写真2)。口演発表の合間にポスター発表94演題が行われた。

今回の学会に参加した職種別参加率は、会場でオーディエンス各個人に配布されたアンケート用のボタンを押した集計より、音声言語病理学士(日本の言語聴覚士に類似)が65%で一番多く、看護師は3%であった。アメリカでは音声言語病理学士が主体的に嚥下障害患者をみているため、看護師の参加が格段に少ないことを改めて実感した。

参加者の出身国は大きくまとめると、北アメリカが66%で、アジアが14%であった。



写真2 学術論文口演の様子

2. 口演・ポスター発表

口演のセッションでは、NICU以降の栄養補給剤の経口投与を容易にする方法、チューブによる食物摂取：乳離れさせる決定と過程、好酸球性食道炎、慢性の咳、丸のみへの植え込み機械的な付属物、感覚と丸のみ、イヌ科の動物の嚥下困難：診断と管理の批判的評価というタイトルそれぞれで発表があった。中でも犬の嚥下障害に焦点が当てられ、治療目

*日本赤十字広島看護大学 ヒューマン・ケアリングセンター 認定看護師教育課程

的で嚥下造影，嚥下内視鏡，バルン拡張，ボトックスの使用や胃瘻造設まで用いているのを知り驚いた。

日本からの口演発表は，5演題でポスター発表は29演題と多く，そのうち看護師の発表は3演題であった。発表内容は，肺炎の合併症が唾液のsIgA集中の増加に関連，経管栄養の管を留置した患者や経管栄養を施行していない患者の嚥下機能の評価や摂食状況，経管栄養チューブ離脱の要素であり，どれも関心深いものであった。

また，私が今まで臨床で多数対応してきたパーキンソン病患者に関する発表では，カプサイシンゼリーを使用して飲み込みの機能が改善される，電気的な刺激を与え飲み込みの改善を図る老化を伴う咀嚼嚥下の嚥下造影所見，流涎について，足音と舌運動の強さについてなど興味深い発表内容であり，今後，臨床で実践出来る内容の検討をしていこうと考えている。

残念ながら日本人のAward受賞者はいなかったが，最新の知識と最前線の研究を知ることができた。

3. Welcome Reception

レセプションは学会出席者同士の，国際的なコミュニケーションを図る場である。私は初めての参加であり，積極的に話をするというより，会場の雰囲気を楽しんだ。日本からの参加者は知人が多く，最近の情報交換をした。才藤栄一教授（日本摂食・嚥下リハビリテーション学会理事長）から，アメリカのリハビリテーション医師や音声言語病理学士の数人に，摂食・嚥下障害を専門とする認定された日本の看護師として私のご紹介をいただき，挨拶をすることが出来た（写真3）。日本には摂食・嚥下障害看護認定看護師がいることや，専門分野を学ぶ時



写真3 日本摂食・嚥下リハビリテーション学会理事長（右上）らと

間の多さに驚かされている様子であった。会場は終始にぎやかに会話が交わされていた。

おわりに

日本ではチーム医療を行うことが重要であるといわれてきており，Transdisciplinaryの中での看護師の活動や役割を示していく必要がある。現在はまだ，活動や発表が活発的であるとはいえない状況である。看護だけの評価では難しい点もあるが，今回の学会参加を機に改めて活動や研究を行い，発表していくことの必要性を感じ，少しでもエビデンスを出せる活動を行っていきたいと考える。

食べるということは，世界共通で人間の基本的欲求の一つである。しかし，日常的である食べることの障害を専門的にみる人が十分であるとはいえない。今回の学会に参加し，国際的に共通する研究視点や臨床に戻ってからの課題の視野を広げることが出来た。また，教育課程の授業では，研修生にグローバルな視点での摂食・嚥下障害について伝達する機会にもつながった。

謝 辞

本学会参加は，日本赤十字広島看護大学より海外出張旅費助成を受けて参加するご配慮をいただきました。貴重な機会を与えてくださいましたことに深く感謝申し上げます。

参考文献

戸原 玄（2010）. 18th Annual Dysphagia Research Society Meeting印象記. 日本摂食・嚥下リハビリテーション学会雑誌，14（1），53.